

編集後記

編集長(ダン シロウ)

ご覧頂きましたか？ 第30号発刊を記念して、執筆者個人別編集版がアップされています。どうぞ関心のある著者のを。

また今号も新しい執筆者が一人。朴 希沙(Kisa Paku)さん、大切な観点からの丁寧な取り組みの省察だ。

第31号を数えるにあたって、五十余名の多彩な連載陣に大いなる感謝を表しておきたい。もっともこれだけの大人数になると、それぞれの事情があって、今回は珍しく五名の方が休載。そんな事情も起きてくるが、全体の総ページ数が決まっているわけではないweb雑誌ゆえ、そのあたりは自在。毎号、増えたり減ったりして、このボリュームで、こんなコンテンツでフリーマガジンというのも自慢だ。

季刊定例発行はほぼ遅れることなく八年。創刊二年目の2011年3月には、東日本大震災直後の発行になったが、編集後記でそのことに触れながら定期発行した。そしてその時書いたことに引っ張られるように、被災地との細く長いおつきあいが継続中だ。

何も起きない世界を生きることは誰もできない。まさかこんな事にの連続が人生である。そんな中で、31号をお届けできているのはちょっと自慢だ。各連載のような継続される営みの記録が、どこかの誰かの今を支えることがあれば幸いである。

こんなことが可能なのは社会のインフラ整備との相互作用ゆえだ。読者である皆さんも、各自の受信システムを駆使して、その一翼を担っている事になる。

誰もが簡単に使えるようになった社会の仕組みは、フェイクニュースの流布や、地位ある者の節度ない思い込み放言をも垂れ流しにさせてしまっている。そんなものとは一線を画しながら、発信の自由を確保し続ける、これが大切なことだろう。

今後もできる限りフリーにと思って編集している。どうぞ、読者として、執筆者として、いっそうのご声援をお願いします。

編集員(チバ アキオ)

対人援助職の職能団体は自分たちの資格の価値を守ることを倫理綱領で定めている。その中には資格の既得権も含まれることが多い。それが生産的に回っていれば問題はないが、いざ自分たちの資格ムラが崩されそうになると、その動きにはどう反応するのか。臨床心理士・公認心理師の動きをみても

なかなかつらいものを感じる。超高齢社会、人口減少、人材不足、サービスの合理化の課題は急務で既にその兆しは顕著である。今後、資格ムラも維持できなくなることはある。対人援助領域における資格制度は、そもそも提供するサービスの質を向上、あるレベルを保つために成立をしてきた。その資格制度による質の確保が限界を迎えているように思えてならない。現状ではお金がないと、そして時間がないと資格を得ることができない。学歴差別、経済的差別の温床にもなりかねない要件もある中で、人材不足となり、ワーキングプアも指摘されて久しい。資格制度に何もかもを求めるのも酷である。その職に就いたものが向上できる機会をどう設けていくかがポイントになる。その基礎となるところでは置かれた労働環境において学ぶ時間をどう確保できるのか？経済的な余裕をどう確保できるのか？にかかっている。

こんな現状を見た場合、やはりこのマガジンの意義深さが際立つ。資格による排除もない、経済的負担が無料、対人援助学会自体も会費も財布にやさしく、研究会も参加費無料である。研究者や実践者が社会に対してできることは、これまでの社会にあるような「学会」「研修会」だけではない！と、この対人援助学会では宣言してきた。知っているものが相互にできることがある。経済的選別、時間的余裕の有無による選別とは距離を持つという姿勢を示してきた。つまりマガジンも学会もいわば社会事業的側面があるといえる。そのことが30号を迎え、時代的により明確になった。それもまた複雑な心境である。私たちのような発信は内容もやり方も非常に挑戦的であり、挑む価値があるものに向かっているとあらためて感じている。この挑み方は非常に私の好みである。

編集員(オオタニ タカシ)

12月1日に、対人援助学マガジン30号発刊記念号が発刊されました。20号以上連載されている方の原稿をまとめた著者別編集版が、なんと34本も掲載されています。私もちゃっかりぎりぎり20回の連載でまとめて頂きましたが、30回連載の方も少なくなく、その原稿の厚みは圧倒的です。

20回、30回というのは、そのまま5年、7年半という執筆してきた年月に換算されます。30回続けて読んでいる連載はいくつかありますが、初期のころの原稿を見返すような機会はあまりなく、今回の著者別編集版は、そんな珍しい機会を与えてくれました。

7年半前と今と、ほとんど変わるところがないという人の方が少ないでしょう。執筆者が取り上げているテーマや切り口、語り方には、やはり違いを感じます。しかし一方で、話題やテー

マはさまざまであっても、そこに通底する軸のようなものも感じます。だからこそ、長期連載が成し遂げられていると言えるのかもしれない。

新刊の31号とともに、ぜひご一読ください(一読という量ではありませんが…!)

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻31号

第8巻 第三号

2017年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第32号は2018年3月15日
発刊の予定です。

原稿締切2018年2月25日!

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもあります。執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと…というのもあります。多くの方達が連載8年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

青い空、海に大型貨客船。だが昨今のクルーズ船ブームのつもりでも、タイタニック号でもない。このイラストは、映画「オレンジと太陽」の原作「からのゆりかご」を読んだインパクトから描いた「木陰の物語」からのものだ。

たくさん子ども達が、英国の施設からオーストラリアに児童移民させられ続けていた歴史。実は同じ時期、似たようなことは世界中で行われていた。

事情は様々だが、政治がそれぞれの現実を形成した。そして該当しない者はそんな事実を知らず、関わった者も、知っていた者もやがて忘れた。

当事者が声をあげなければ、なかったことにされてしまう歴史の山を、人類はそこそこで積み上げてきた。今も同じである事はいうまでもない。

誰かを責めるためにではなく、私達がそういう生き物であることを自覚しておかないと、無知で残酷な者達が、同じ事を繰り返す。

庶民は忘れたふりをして目をそらす。そこそがが再来の予兆になっていることに気がつかないのか、分かっている目を背けているのか・・・

(2017/12/5)